「樋口一葉」を巡る言説空間

――一葉日記の出版による『青鞜』の反響を中心に

李　賢　晙

はじめに――「一葉」ブーム

明治期における樋口一葉を巡るブームは、新聞や雑誌を始め、メディア、文学界、そして教育界[1]など、社会全般に渉り幅広く広まっていた。そのブームは作家を目指す女性たちにとっても例外ではなかったのである。とりわけ明治から大正にかけ博文館からの四回に渉る全集出版が、当時の一葉の人気を物語っている[2]。その他に『歌集』や『たけくらべ』『十三夜』の短編出版など、明治から大正にかけ樋口一葉の作品は、八回に渉って出版されており、絶対的な知名度を誇っていたと言っても過言ではあるまい。このような出版状況は、時代を越えて、女流作家として樋口一葉を、一層強く人々の頭の中に刻み込んだのである。

上述のような一葉ブームは、良し悪しはともかくとして、「一葉観」とも言うべき概念を形成する結果となった。作家を始め文学研究者たちが作家樋口一葉との対話を図るために、それぞれの領域、つまり、文学史、明治社会文化史、女性史などで「一葉観」の読み直しを行ってきたことはもはや周知の事実であろう。その中でも、とりわけ本論では、『青鞜』に重点を置き考察してみたい。『青鞜』の作家たちは、どのように樋口一葉という女流作家を見つめていたのだろうか。そこで、「新しい女」として、自分たちのアイデンティティを打ち出していた彼女たちの中に投影されている樋口一葉像を明らかにしたい。

この視点は「旧い日本の最後の女」と呼ばれた一葉像を「新しい女」として見直す手がかりとなるであろう。さらに「新しい女」を、ひたすら西洋の影響から生まれた明治・大正期の社会現象と見做す説から離れ、内なるもの、即ち、日本の近代化の過程で生じた事象として捉え直すものである。そこで、「新しい女」の系譜の内でも、欧米とは異なった文

脈、つまり、日本の内発的な動きの中から「新しい女」の姿を見出すことができるのではないだろうか。本論はこのような問題意識から出発しており、とりわけ、一葉文学の土壌の中で直接、或いは間接に影響を受けていた『青鞜』作家が説く「樋口一葉」言説を解き明かすことが第一義である。そしてその過程の中で「新しい女」の始発点としての一葉像を見直してみたい。

一　樋口一葉から『青鞜』へ

女性で物書きというだけで珍しがられた時代背景を勘案するならば、樋口一葉という女流作家に向けられる同性の関心は、また特別なものであったと思われる。平塚らいてうが言及しているように、一葉は若い女学生の間で「姉さん[3]」のような存在で、少女たちから崇拝される対象であった。そのことは、同時代の少女たちの価値体系の中で育まれた「一葉観」と言っても差し支えないだろう。それまでの「一葉観」は、文学界を中心に言説化されてきた。その中で主に、男性作家を中心に解釈されてきた「一葉観」は、関良一氏が指摘しているように、露伴・鴎外の「叙情詩人」としての「一葉観」や、相馬御風以来の“The Last Woman of Old Japan”という「一葉観」がある。そして「青年文」の田岡嶺雲が論じた「ヒューマニスト、下層社会の同情者」としての「一葉観」、また、「近代の最初の女」と解釈し得る藤村や秋骨の「一葉観」があると言われている。[4] これに加え中山清美氏は、斉藤緑雨の「虚無的なリアリストとみる型[5]」にも言及している。即ち、これらの様々な言説空間の中で樋口一葉は解釈され、そしてこの言説化を経て半ば「神話化」されてきた。それによって女流文学者として不動の位置を占めることができたのである。これらの「一葉観」に対し、明治大正の女性たちにとって、実際一葉はどのような位置に立っていたのであろうか。とりわけ、女学生の間で「姉さん」として位置づけられ、人気を博してきた「一葉観」についてもう少し詳しく述べてみたい。

一葉ブームは、女性の手によって初めて作られた雑誌『青鞜』（明治四十四年九月創刊）の同人たちにも幅広く広まっていた。特に、同人が全国に亘っていたことからも一葉の人気の広さは察せられよう。即ち当時、女性たちの間における一葉ブームは、局地的なものではなく、日本全域に亘っていたと考えられる。

これらの一葉ブームに対する事例について取り上げてみよう。一葉の名前にちなみ「葉」の文字を取り入れ、本名の「てつ」から改名した上野葉子がいる。[6] このことは一葉ブームを最も象徴的に現わしている事例であったと言えよう。上野葉子は高等女学校で教鞭を取り、一生を職業婦人として生

きていたが、その傍ら婦人問題を批評する論文を『青鞜』に乗せたり、小説を書いたりするなど、活発な文筆活動を行っていた。[7] さらにその他に、直接樋口一葉について言及した同人たちも多い。例えば、一葉を「姉さんの様」に慕っていた『青鞜』同人の木内錠は、『女子文壇』に「一葉女子論」（一九一二年）を掲載している。木内はその中で、自分が女学生の頃読み耽っていた『通俗書簡文』や小説、日記などについての感想を綴り、一葉の作品の熱心な読者であったことを語っている。そして劇作家小山内薫の妹で同じく劇作家である岡田八千代が一九二四年に『たけくらべ』を脚色し、「芽生座」で公演を果たしている。その他にも、『青鞜』の主筆である平塚らいてうをはじめ、田村俊子・長谷川時雨・山川（青山）菊栄・生田花世・今井邦子など、『青鞜』紙上を賑わす多くの女性たちが樋口一葉に注目している。

このように「新しい女」として『青鞜』を位置づけてきた彼女たちの思想の背景には、確かに樋口一葉といううねりを発見することができよう。では一葉が残した作品との対話を通して、近代の女性たちは樋口一葉について何を語り、位置づけ、或いは内在化してきたのだろうか。本論では樋口一葉から『青鞜』への影響関係を見直してみたい。

二　平塚らいてうにおける「一葉観」形成をめぐって

二―一　「一葉観」の再構築

明治四十五年五月に樋口一葉の日記が加わった『一葉全集』が出版されるや、これに応ずる形で、大正元年十月に平塚らいてうは、「女としての樋口一葉」を『青鞜』紙上に掲載する。これは一葉の日記に対する批評であると共に、最も私的な自己表出の場であるところの日記から、人間樋口一葉に対する評価を下すものでもあったように見受けられる。

まず、らいてうの「一葉論」を簡略に紹介したい。最初、一葉の日記の内容「誠にわれは女成けるものを」[8]という一句と、与謝野晶子の『青鞜』創刊号に乗せた「山の動く日来る」から始まる詩を比較しながら、両者の視点の差について述べている。その中でらいてうは、当時の女性たちの間で絶大な人気を博していた一葉人気の秘密が、「弱者として何事にもじっと耐えねばならなかった日本の女」[9]の心情を代弁していることにあると評している。一方、「過去の日本の女」として、一葉の思想を披瀝し、「儒教的な思想」・「小乗思想」・「浮世草紙、元禄文学など小さい頃から耽読してきた小説による思想」・「功利思想」の四つに分類して説明している。[10] 続けてその思想の分類に従い、小説や日記を比較しながら分析するものとなっている。

すでに山根賢吉によって指摘されているように[11]、このようならいてうの「一葉論」は、相馬御風の“The Last Woman of Old Japan”という「一葉観」を引いている。この視点は中山清美氏[12]によりさらに展開され、今日まで意味深い示唆を与えるものとなっている。論の骨子をまとめると、「新しい女」の「一葉受容」が、彼女たちが目指す方向を模索する際に、一葉を「旧い女」として定義することで、自らを「新しい女」として位置づけたということである[13]。関礼子氏はこの視点を踏え、平塚らいてうに「一葉への共感と反発の二面[14]」があったと指摘している。

本論はこれらの視点を踏まえながら、さらにテクストに基づく読みを通して、らいてうの「一葉観」を見直してみたい。なぜなら、上記の論点は、相馬御風の一葉論の検証を通じ、一葉を崇拝する当時の文壇の状況に主に視点が置かれ、らいてうの「一葉論」の徹底した検証は行われていないからである。また、ジェンダー論に依拠した論証によって、らいてうの「一葉論」の内容そのものが十分に検討されず、『青鞜』周辺の状況の分析から、らいてうの論理が説明されているのである[15]。従ってここでは、らいてうの文章から浮かび上がる「一葉観」を、一葉の作品と日記を参照しながら、新たに検討してみたい。

それでは、まずらいてうの「一葉論」を引いてみよう。

今日晶子氏を得て新日本の我々が「われは女ぞ」と誇らしげに高唱し得たのはやはり一葉によって代表された幾百年の圧迫の下になおも生きねばならなかった過去の日本の女が「我は女なり」と嘆いた諦めの涙の後であることを忘れたくない。

すでに「天才」として明治二〇年代の後半から、死後の明治三十年代に至るまで、一世を風靡してきた樋口一葉に対し、らいてうは、「過去の女」として一葉を位置づけている。さらに、「一葉には一葉自身の思想がない。問題がない。創造がない[16]」と辛辣に批判しているのである。しかしこれに対し、同じく『青鞜』同人である木内錠は反旗を翻しており、『女子文壇』（大正元年十二月）に発表した「一葉女史論」の中で、次のように述べている。

決して一葉には世間の多くに有勝な軽率な恋はとても思ひも及ばなかつたことでせう、それを敢て許し得る大胆な良心はもつて居りませんでした。（中略）今の新しい婦人とも呼ばれるやうな方々から見たら、自覚して居ないからとも云はれるでせう、でも小説でも書く婦人として、此位穏やかな謙遜な心持で有り得たことを私はむし

ろ喜ばしく頼母しく思ひます。[17]

ここで明らかなことは、らいてうの「一葉観」が、『青鞜』の全体としての態度ではないということである。それでは、らいてうの「一葉論」はどこにその重点が置かれているのだろうか。詳しい作品分析に入る前に次節では、「女としての樋口一葉女史」が書かれた明治・大正初期の『青鞜』に関わる言説について考察してみたい。

二―二　らいてうの視座から見た樋口一葉の「恋愛観」

近代の西洋文学の翻訳によりもたらされた「恋愛」という観念が、知識人たちによってプラトニックラブといった意味づけを為されてきたことはすでに指摘されている。[18]即ち、「恋愛」という事象は近代の新たな創出物として、近代を生きる人々をして、個人の主義や思想の近代性を問題とする傾向があったからである。

それに加え「恋愛」を題材に取り上げ論じること自体、主義や思想が近代的であるか、或いはそうではないかという、当代の言説空間を象徴していると言える。従って、ここでらいてうが敢えて樋口一葉の「恋愛観」を取り上げ、一葉における「新しい女」としての文脈を探ろうとした論理は、当代の言説空間の中で樋口一葉を位置づけようとした意図に基づいていると考えられる。

このようにらいてうは、この「恋愛」を巡る姿勢に、近代の「新しい女」としての資質を見出そうとしていた。なぜなら、そこに作家としての一葉でなく、一個人としての一葉が立ち現れてくると思っていたからである。このようならいてうの「恋愛」に対する視座は、すでに彼女が『青鞜』を通し、女性たちの意識の近代化を促していく中で、重要なキーワードとして意味づけられてきたものである。

しかしながら、らいてうにとって「恋愛」を巡る理論的な認識は、「女としての樋口一葉女史」の後のことで、エレン・ケイの『恋愛と結婚』（明治三六年）がそれである。らいてうがこの書を翻訳掲載するのは、大正二年一月（『青鞜』第三巻一号）からであり、上記の「女としての樋口一葉女史」を書いてから約三ヶ月後となっている。これに先立ち、らいてうの「恋愛」を巡る言説には『人形の家』の批評がある。『青鞜』の二巻一号に付録として「ノラ」が取り上げられているが、その中でらいてうは「ノラさんに」という題目で書簡文に擬した感想文を書いている。ここでノラの夫への「愛」について論じているが、「愛」と上記の「恋愛」に対する見識の差はそれほど離れているものではないと思われる。つまり、自主的な自我の発露の帰結としての「愛」や「恋愛」であらねばならないということがその骨子である。そしてら

いてうは、一葉の日記から一葉の「恋愛観」を拾い上げ、そこに近代的な言説を打ち出そうとしたのである。従って彼女が意図したことは、「恋愛」自体を女性の自我の発露として捉える視座の発見へとつながっていると推察できる。次節では、以上のらいてうの「恋愛」や「愛」を巡る問題意識を視野に入れながら、らいてうが読んだ「樋口一葉」を紐解いてみたい。

二―三　らいてうの「一葉」言説
――『雪の日』の「恋」を中心に

「女としての樋口一葉女史」という題目からも明らかであるように、らいてうがここで主眼とした論題は、樋口一葉の「恋愛観」である。らいてうはこの論題を解き明かすことで、二十四歳の若い女性としての一葉像を捉え直すことを試みた。この試みはそれまで半ば「神話化」されてきた「一葉観」を、生身の人間として評価し直すことであったと思われる。ここでらいてうの問題意識の一端を表している文章を引いておこう。

この恋の顛末を語ることは一葉の性格の発展を窺う上に、彼女の若き女としての情的生活とその思想との衝突、社会及び境遇の圧迫等を知る上に、その恋愛観や、理想等を明らかにする上に決して無益なことはない。[19]

それでは、らいてうの視点から映し出される一葉の「恋愛観」は、どのようなものだったのであろうか。その裁断の切り口として、まずらいてうは、一葉の日記に書かれている半井桃水とのやり取りの記述を分析している。ここで、らいてうが引用した一葉の日記「若葉かけ」を確認しておきたい。

秋の夕暮ならねど思ふことある身にはミる物聞ものはらわたを断ぬはなくともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど親はらからなどの上を思ひ初れば我身一ッにてはあらざりけりと思ひもかへしつべし　あゆむともなしにいつか九段の坂上には成ぬ　こゝよりはいとにぎわゝしく馬車など音絶ず心せずはあしもとなどもあぶなげなり　猶おもひつゝけてうつむき勝にくる様のいかにあやしかりけん[20]

この日、一葉は桃水宅で何時間も師の帰りを待っていた。そこで期待していた小説が新聞に掲載されないことを聞き、深く失望したのである。その後、帰りの道で一葉は生活の困難と、桃水への恋心のもつれから自殺を考える。しかし、自分の感情より、家族への思いが込み上げ、苦悶している。こ

の日記には当時の一葉の心の揺れがはっきりと現れていると言えよう。ここかららいてうは、「恋」に葛藤する一葉像に注目しているわけである。さらに上記の引用から看取される一葉の心情についてらいてうは、「一葉の恋はどこまでも慎み深い女だっただけ、真面目なものだった」と分析し、この心象の表出の場として小説『雪の日』[21]に着目し、考察を行っているのである。

では『雪の日』に関係する一葉の日記の内容に触れておこう。これは明治二十五年二月四日、雪が降る寒い日、一葉が桃水宅を訪れたエピソードを綴ったものである。その日、一葉は寒い玄関先で、桃水が寝床から起きるまで一時間以上待っていた。しばらくして、起きてきた桃水が、手作りの汁粉で一葉をもてなす。その後帰り道の雪を心配し一晩泊まることを勧める桃水の話を断り、一葉は無理に家に戻ってくるのである。

このように、この日の日記に書かれている一葉の心境を、らいてうは一葉の「恋愛観」に対する端緒として分析している。それではここで小説『雪の日』のプロットに触れておこう。

ヒロイン「珠」は山里の小村に生まれた田舎娘で、両親とは死に別れたが、代わりに母の姉に大切に育てられた。「珠」が十五歳のとき、小学校の教師であった「桂木一郎」(三十三歳)を慕っていたことが村中に噂され、伯母が激怒する。それまで「桂木」に対する自分の気持ちに気づかなかった「珠」は、これがきっかけとなり恋に落ちる。そして二人の仲を反対する伯母を裏切り、雪の降る日に「桂木」と共に出奔してしまうのである。だが、今や心変わりしてしまった夫に失望し、もはや死んでこの世にいない伯母に対する悔恨の涙を流すのであった。

これについてらいてうは、「かの『雪の日』は単に作としてはさほどのものとも思わないが、その腹稿の成り立った時とを考えるとさすがに興味を思える」[22]と指摘した上で、一葉にとって「恋」や「悟」が、どのようなものだったにかについて、さらに分析を加えている。これに関連して、らいてうが挙げている次の「よもきふ日記」を確認してみたい。

ひる頃より雪ふり出づ　万感こゝに生じて散乱の心ことに静めがたし　我が雪の日をめづるはめづるにはあらでかなしむ也けり　かの火桶をはさミてものがたりのどかに手づから調理し賜はりしるこの昔恋も悟もかの雪の日なればぞかし[23]

ここで挙げている、一葉の「恋」や「悟」についてらいてうは、「一葉はその根本が儒教でかたまっていた人だったか

らお珠のこういう運命を特に描いて一つには現在の己れを戒めたのかもしれない」と、『雪の日』のヒロインと一葉を重ね合わせ読み解いている。そして最終的に、一葉の「恋」について次のように指摘している。

> 彼女はとうてい恋に酔い恋に狂い、夢の中に死ねる女ではなかった。（中略）彼女の眼はその若さに似げなくあまりに冴え過ぎている。周囲のみならず、遠方まで見え過ぎている。彼女の片意地な、勝気な、孤独な、どちらかといえば、悲しい性格と神経質に過ぎる廉潔は総て華やかな恋には不適当である。[24]

つまり『雪の日』のお珠が悔恨の涙を流すことについてらいてうは、一葉の「悟」と関連付け「人間の情的生活を軽視する小乗思想」と断じているのである。その根拠として実際の婚約破綻に対し一葉が「小町の末我やりて見たく云々」とした態度について、らいてうは本人の「反省ない」平然とした態度に、「一種の静的理想境」を指摘している。これがらいてうの主張する一葉の「小乗思想」である。

らいてうが、一葉の「恋」や「悟」を通して主張しようとしたことは、一葉が「新しい女」ではないという点にあった。しかし一方で、他の作品については「社会と個人との関係、強者と弱者との関係に対する一葉の胸にあまる悲憤の叫び」[25]だとして、一葉の心の叫びにも耳を傾けているのである。ここからも察せられるように、らいてうは一葉の社会に向けられた批評眼よりも、「恋愛観」に見られる「一葉」批評に集中しようとしたため、限られた立場による「一葉観」を打出しているのであろう。

しかし、先述した一葉の「恋愛観」が、儒教思想に基づくものだとしながら、一方でらいてうは一葉の「恋」に悶え苦しむ心情について次のように、言葉を尽し、同情を込めて述べているのである。

> その心の奥底に分け入って彼女の愛のいかに強かったか、その理想とし、プライドとするところの那辺に存じたかを同情の眼で以って観察すれば咎める気にもなれない。[26]

即ち、自分たちの「恋愛」に対する価値観を上位概念としながら、同時に「一葉」に対する共感をも示しているのである。その上で、一葉の恋が「盲目的」で「純真な心」ではあるが、しかしそれは一葉自身の意思と思想に左右されていたと指摘するのである。ところで、この自分の意思と思想に基づく「恋愛」こそ、「新しい女」の「恋愛観」ではなかった

か。このような揺れ動く姿勢を取ることによって、らいてうは「神話化」されたきた一葉という「正典（カノン）」を、表面上、排撃することに成功しているのだが、しかし、一方でここには彼女の「一葉観」に対する二面性が見え隠れしている。なにより、「恋愛」という一面から映し出される一葉像から、樋口一葉の全体像を推し量ろうとしたがために、らいてうはここで論理的な視点に立つことができなかったと思われる。それが一葉文学に流れる、冷徹に社会を見据える確かなまなざし、つまり弱者の立場に立ち、物を書くという挑戦を認めながらも、「新しい女」として受け入れられなかった結果となったと思われる。

三　『日記』が語るもの―田村俊子の読みを中心に

三―一　幸田露伴を媒介として―第二の樋口一葉の出現

満十八歳の田村俊子が小説家を目指し、露伴に師事したのは明治三十五年四月のことであった。そして翌年二月に初の作品『露分衣（つゆわけごろも）』を『文芸倶楽部』に発表し、「第二の樋口一葉の登場」と称えられながら明治文壇に名を記したのである。ここで注目すべきことは、この作品が「樋口一葉ばりの文章体の作品[27]」であったことである。ここでまず、露伴と一葉の関係について触れておこう。

もはや周知のように森鴎外を始め、露伴、緑雨が『めざまし草』の「三人冗語」の中で、一葉の『たけくらべ』を絶賛している。彼らはこの中で一葉の文章を「多くの小説家に、此あたりの文字五六字づつ技倆上達の霊符として呑ませたきもの[28]」と褒め称えている。その後一葉と露伴が初めて会ったのは、明治二十九年七月二十日で、一葉の死ぬ約四ヶ月前のことであった。では、その初対面の様子を覗いてみたい。

午後二時ごろ　計らず三木君幸田君を伴ひ来る　はじめて逢ひ参らす　我れは幸田露伴と名のらるゝに有さまつくぐうち守れば色白く胸のあたり赤く丈はひくゝしてよくこえたり　物いふ声に重みあり　ひくゝしづみていと静かにかたる[29]（後略）

続いて同じく一葉との初対面を露伴は次のように語っている。

故樋口一葉女史は一見した所、先づ薄皮立の締つた、聡明そうな顔した人であつた、敢て醜いと云ふ程ではないが、去りとて非常な美人ではなかつた、寧ろ妹の方が顔立は好かつたやうに思ふ、其れからまた応対が巧みであつた、進退動作節に合して決して人を反らさない、是迄の生涯が如何に辛労の生涯であつたかは是に拠つても察

せられる[30]（後略）。

この日、一葉は露伴に会ったことを長文に渉って、その感動の気持ちを綴っている。周知のように、一葉の作品の中で『うもれ木』と『暗夜』は、露伴の作風から多くの影響を受けていた。そして普段から好んで露伴の小説を耽読していたことから、露伴の訪問に対する一葉の心の中の喜悦が察せられよう。尊敬する巨匠を眼の前にした一葉の感激が十分伝わってくるのである。そしてこの日の出会いから露伴と一葉の交流は生前、そして死後まで続いたのである。[31]

露伴は、「藤式部、清納言」に喩えながら一葉の文学を高く評価した。そして露伴のこの思いは、弟子田村俊子という女流作家へとつながっていくのである。露伴は俊子の習作期において指導を行う際、樋口一葉の文体を学ばせたと言われる。[32]その文体の特徴は関礼子氏がすでに指摘した「女装文体」[33]である。男性作家と異なる女性性を装った、修飾の多い擬古文がそれであったという。これが初期田村俊子の文章体と言われる文体の特徴である。ではここで、俊子がどのような文体で初の作品を書いているのか、『露分衣（つゆわけごろも）』の最初の部分を引いておこう。

庭の桜、盛りなりし頃は病重りて、此世の最期と何事も思ひ諦めは断念ながら、風強き夕べ、硝子越しの花の美しさも、別れの一ト目かと悲しく、誘はゞ共にと念ぜじものを、片手落なる春の山風や、我は浮世に残されて、蜘蛛の糸より果敢なき玉の尾の、何処までもと引き尽したる果、弗と切るゝ折は計られねど、暫しとばかり繋がれつ、彼は空しき遺骸となりたり[34]

上記の関礼子氏の指摘のように修飾の多い擬古文であることが見て取れよう。[35]さらにそればかりではなく、読み進めると一葉の小説の文体のように、地の文が擬古文になっており、会話は口語文になっている。つまり、文章の構成も一葉の小説と類似しているのである。そして文中に句点がなく、読点だけで文章を綴っていることも一葉と非常に似ている。ここからも察せられるように、田村俊子にとって一葉は、初期作品の成立に大いに影響を及ぼしていたのである。この『露分衣（つゆわけごろも）』は、露伴と一葉の影響の下に出来上がった作品と言えよう。このように一葉に対する俊子の思いは特別なものであったと見られ、その心情について以下のように語っている。

この人の小説は私がまだ肩上げをしてゐる頃に大層崇拝して読んだものでした。それで今斯うして一葉全集を手にして見ると、何よりもまづ自分の昔の初心な情緒が忍

ばれるのでした。自分の娘時代に着古したキモノをふと、葛籠の底から取り出して、その匂ひを再び嗅いだような床しいおもむきがあるのでした。（中略）五年間の日記を通してその上に現はれた女史の姿をも、やはり私の往時の若やかな情調を背景にしたなつかしい涙の内に引包んでしまつて、唯あた、かく樋口夏子と云ふ女性の全体を抱擁してしまつているやうなところがありました。[36]

田村俊子は人気作家になる前から親しんでいた一葉の作品について、その頃の懐かしさと親しみを込めて述べている。俊子にとって一葉は、習作の際のテクストであった。だが、既に女流作家として文壇に名を馳せている田村俊子にとって、一葉は自分の青春の一部として記憶されているのである。俊子は明治三十五年に弟子入りし、明治三十九年頃に露伴の元を離れ、舞台女優になる。[37]そして明治四十四年『あきらめ』が『大阪朝日新聞』の懸賞小説の一等に当選し、作家としての地位を固めることとなった。上記の「私の考へた一葉女史」は、このときに書かれたもので、十年前の文学修行時代のことの思い出が書き記されているのである。

このように、習作期を通り過ぎ、今や世に知れ渡った女流作家として、つまり同じ立場に立って俊子はここで、樋口一葉という作家を語ろうとしている。「私の考へた一葉女史」は、昔の懐かしさが漂う語り口で始まっているのだが、実は一葉文学に対する同じ立場に立った作家としての批評であったと思われる。

三―二　「自我」に生きる芸術家

田村俊子の「私の考えた一葉女史」は、平塚らいてうの「女としての樋口一葉女史」より、一ヶ月後に発表されたもので、やはり一葉の日記出版に対する反響であると言える。このとき俊子はもはや、女流作家として確かな位置を築き、前年の『青鞜』創刊に当たり、『生血』という小説を発表している。つまり『青鞜』紙上に「新しい女」としての自分を刻印しているのであり、その印象を世間的にも認知させたのである。即ち、この論評は、時代の先端を生きる同じ女流作家に求められた一葉評として位置づけることもできよう。

まず、俊子の「私の考えた一葉女史」を紹介したい。この論評は全部で八節に分けられ、それぞれ一葉の日記の時間軸に従って分析している。節に沿って説明すると、「一」では、一葉の人格について、「二」は一葉の桃水に対する感情について分析しており、「三」では桃水に対する恋が作品に与えた影響を取り上げている。続く「四」では貧しさが一層作品に深みを与えていると語っており、「五」では一葉の文学が反社会的な性格を帯びることとなった理由について、俊子自

らの私見を述べている。「六」では一葉が社会に対する反感から再び小説を書いていると説明し、「七」ではその一葉の思想について批判を加え、最後の「八」では一葉文学が「自己本位」であると断じているのである。

これらの八つの節から浮かび上がる言葉を拾い上げると、「人格」・「恋」・「貧」・「芸術」・「反社会的」・「自己本位」などの言葉が浮上してくる。だが、とりわけ田村俊子の「一葉論」は、これらの言葉をつないでいる一つの軸―「自己」―からなっていると思われる。即ち、上記の八節を貫いているのは、田村俊子が注目し、意識しながら述べている一葉の「自己」なのである。俊子の「一葉論」は、平塚らいてうほど辛辣ではないとしても、半ば批判的な立場に立っていることも確認しておきたい。

つまり、俊子にしても、らいてうにしても、二人にとって「一葉」は、職業作家として近代を生き抜いた紛れもない「新しい女」としての認識があった。だが、一方で、それを全面的には受け入れがたい点があったのである。それはここで俊子がいう「女大学的な」ところであり、らいてうがいう「儒教思想」である。これは一葉を「新しさ」として全面に受け入れることを拒む大きな壁であった。

なお、この見解は当時の『青鞜』の女流たちの「一葉観」を二分させた分岐点であったと思われる。即ち、一葉に対する『青鞜』内の意見は必ずしも一致するものでもなければ、それを否定しようとしたらいてう自身も、全面否定はできなかったのである。

このような状況を踏まえた上で、田村俊子がどのように、一葉を見つめていたのか、ここでもう少し検討する必要があるだろう。まずそれに先立ち、俊子が言う一葉の「自己」について触れておこう。

> 知己へ行つて一円の金を借り質店の軒をく潜ると云ふ様な乏しい生活のなかで、折々の恋の追憶に軟らかくその感情を弄ぐられると云ふ事は、女史の情味的感興に強い色付けをしずにはおかなかつた。そうして貧窮した生活裡にあつて、女史の小さな智的徳的の自我の間にはからずも斯かる情的の色が一とすぢ動き初めたと云ふ事はやがて、女史自らに、おぼろげながら「自己」と云ふ意識を生じさせる因にもなつた。[38]

ここで俊子は、一葉の「恋」が彼女の作品形成に大きく影響したことを読み取っている。その上、「恋」によって目覚める「自己」への意識まで、日記の中から読み取っているのである。ここで明らかなことは、俊子が「自己」がどうあるべきかという問題に逢着していることである。俊子にとって

「自己」はどのような認識で位置づけられた観念であったのだろうか。ここでは、「私の考へた一葉女史」より二ヶ月先立ち、『文章世界』に掲載された俊子の「微弱な権力」[39]という文章を比べ合わせて考えてみたい。

私の自我的生活！けれど私は決して、そこに自分の真の自由と真の自覚と、そうして自信と超越とを見出してゐるとは云ひ得ない。

私の生活には、ある微弱な権力が絶えず従属してゆく。その微弱な権力は私の心の両翼をいつも軽く押へ付けてゐる。私がその微弱な権力を払ひ除けやうと焦燥する時、——さうしてその権力をかりにも払ひ除け得たと信じた瞬間に、私はわづかに、辛つとそこに自我の影と自己の力とを認めるだけのものなのである。[40]

俊子にとって「自我」とは、どのようなものだったのだろうか。そして、それを「一葉像」からどのように映し出しているのだろうか。この問題提議は、俊子の視座に置かれている一葉の「自己」を突き詰める上で、必要な過程であると考えられる。

上記の「微弱な権力」の中で読み取れることは、「微弱」ではあるが、ある「権力」に抵抗を示してこそ、「自己」というものを取り戻すことができるという論旨である。この「微弱な権力」は、黒澤氏によれば、「男女両性の相剋」を扱っていると示唆しており、[41]確かに俊子にとって「男女両性の相剋」は重要なキーワードであろう。だがしかし、俊子がいう「自我的生活」は、男女の相克以上の意味があるのではないだろうか。その一端を示している部分を検討してみたい。

私は憐れな満足の内に唯ぐうたらとねむりこけてしまふのはほんたうに厭である。芸術的憧憬から起る私の心の様々の要求は、牢獄から空かける鳥を望むやうな究極した、あせつた思ひを抱かせる。[42]

つまり、俊子における「自我的生活」は「芸術的憧憬」から満たされ得るものである。それが「男女両性の相剋」から脱せられる俊子の「微弱」な抵抗であると思われる。即ち、俊子の「自己」とは、作家としての本能であり、自覚すべきである「芸術への追求」の上に果たされる「自我的生活」である。それによって、押さえつけられているある「権力」から逃れることができる。「微弱の権力」の中に流れているメッセージは、一人の女性としての「自己」と、さらに、芸術家としての「自己」とが相克していると言えるだろう。

つまり、田村俊子にとって少なくとも芸術家としての「自

己」は、生活者であるときも常に自覚せざるを得ない葛藤であった。そのため、生活雑記などを書いた一葉の日記の中で俊子が探ろうとしたものは、果たして、一葉が生活の中で表現者としての「自己」を持っていたか、という観点であったと考えられる。そしてこれが、作品の芸術性を問う基準として働いているのである。

即ち、田村俊子にとって、芸術家としての樋口一葉の「自己」に関する追究は、それまで習作期における「娘時代の着古した着物」のように、俊子の中に内在化されていた一葉文学を取り出し、今一度見直す作業の中で、逢着せざるを得ない視点だったと思われる。では、この逢着した難問を俊子はどのように再定義しているだろうか。次節では俊子が行った批評に依拠しながら、「自己」という視点を踏まえ、田村俊子における樋口一葉文学について考えてみたい。

三―三　「下町の新しい女」――一葉日記との対話

「私の考へた」という言葉通り、この評論は田村俊子が考えている「一葉」と言い換えても差し支えないだろう。文学修行時代から始まった語り口の中で俊子の「一葉観」は、一見、懐かしさを伴っているが、しかしその中には、一葉の芸術性を問い直し、大正という新たな時代の文脈の中で一葉を再定義しようとする試みが窺われる。先述したように、このときの俊子は『青鞜』の社員という立場で「新しい女」であることを表明している。ここからも察せられるように、一つは「新しい女」としての俊子の中で、「一葉」を見直すことであった。その作業としてまず俊子は、「娘時代」の「一葉観」から離れることから始めなければならなかったのであろう。

関礼子氏は「一葉切断の身振りは言文一致体の成立」[43]にあるという、大変意味深い言及をしている。つまり、らいてうも俊子も、『青鞜』においても、大正という時代は言文一致体によって「新しい女」を主張する時代であった。それは、いわゆる和文体を華麗に駆使する一葉文学に対する「新しい女」たちの反撃とも言える。事実、俊子も『露分衣』のときの文体を捨て、言文一致体の『あきらめ』で脚光を浴びたことからも推察できるように、今の俊子にとって一葉は、「娘時代」のノスタルジーであるのみである。つまり、文学修行時代に無批判的に受け入れていた一葉の文体から離れることで今の作家としての田村俊子がある。それは当時彼女にとって、自分が一葉以上であるという優越感として働いていたと考えられる。そのため、この「私の考へた一葉女史」は最初から、この視座から書かれていたと言っても過言ではないと思われる。この視座は一葉の人格や作品を語る際にも窺える俊子の態度からも浮き彫りになっている。

自身の心を卑賤なことに枉げない為にはどんな質素な生活にでも甘んじてゐる事の出来るやうな人で（中略）当時の女史の根本観念は学問の見識から得た厳正と誠実であつた。そこには他日芸術を生みだしてくる様な豪華な心持とか、熱烈な放縦な気分とか、燃え上がるやうな青春の歓楽というやうなものは、まるきりこの人の本然性から遠く離れてゐた、（後略）[44]

最初からバイアスのかかっている俊子の「一葉論」は、らいてうの「一葉観」のように、評価と批判の間に立っている。一途に冷静に生きていた一葉の姿を感情論に傾かず評価しつつも、一方で、一葉の「芸術性」について疑問を呈している。言い換えれば、一葉文学は天才的な感覚から生まれるものではなく、あくまでも文学修行を通し手に入れた賜物であり、即ち「糊口文学」としてのみ見做しているのである。しかし、ここで注目したいことは、俊子が「糊口文学」という視座に立って一葉文学を語ることに一貫している中で、そこには常に一葉の「自己」についての追求が行われている点である。例えば、

そうして貧窮した生活裡にあつて、女史の小さな智的徳的の自我の間にはからずも斯かる情的の色が一とすぢ動き初めたと云ふ事はやがて、女史自らに、おぼろげながら「自己」と云ふ意識を生じさせる因にもなつた。女史はこの時に多くを考えた、生活と恋とを引き比べ、活計と文学とを引き比べ、自身の心と骨肉の心との連絡を考へ、他を捨てゝ唯己れの心の力の限りを喚び起こして見やうとも努め、又世間の誤解を防ぐ為強い愛着の念を断たうとする自制の悲痛さに、それをひるがへして宗教的に遙か偉大なものを求めようとし真善美に接しようとしたりした。（中略）覚束なくも、自己の超越と云ふ様な事も考へさせた。[45]

即ち俊子は、「厳正」「誠実」という現実的な一葉が、桃水に対する「恋」により、「自己」という内面を見つめるきっかけを得たと言っている。そしてこの「自己」超越的な考えが、一葉文学に反映されていると分析しているのである。ここで俊子は一葉文学を「恋と貧に悩みながらも、矢張り常に自己と云ふものゝ中から美しく潔い玉のやうな精霊を探ることにはかりつとめてゐた」し、「当時の境遇によって発散された当時の鋭い感受性が、この人の文学の上に著しい効果を現はし初めたのは寧ろ当然のことであった」と断じている。ここで注目すべきことは、俊子は、一葉が常に「自己」とい

うものに自覚的であったと見做している点である。ところが、これこそ「新しい女」と定義し得る素養ではないだろうか。らいてうがいうように、自分の思想を持つこと、つまり自我というものに対する自覚や反省などを備えている女性、それが「新しい女」であろう。この『青鞜』の思考を踏まえながら、樋口一葉の「自己」に関する俊子の指摘を考察すると、これはむしろ、俊子が作家田村俊子として、越えたい山を前にして葛藤している様子を露にしたものとも受け取れよう。つまり、「自己」を常に見つめている樋口一葉像は、らいてうや俊子が強調する「新しい女」の「自我」の追究に関わる価値観につながっているからである。

さらに俊子は、一葉が「無意味な結婚を極力拒んで」自立しようとする姿を見て、次のように記している。

「霜柱くづれなば又たてなほんのみ」

斯う云ふ決心を抱いて、自己と云うものを他から累はなれない為に、自分の善しと認めて進まうとする道を遂られない為に、金の為に文を書かぬと云ふ主義の為に親子主人が餓ゑない程度の貧生活に甘んじ、不安のうちにも目的を定めて、ゆるゆる志す道を辿らうとして女史は遂に周囲を捨て、小さな駄菓子屋渡世に就いた。[46]

ここから読み取れるように、俊子は一葉が自分の人生を主体的に生きようとしたことを認めている。イプセンの『人形の家』のヒロイン「ノラ」が家から抜け出し、「自我」を獲得したときの主体性は『青鞜』にとって重要なテーマであった。主体的な自らの選択として、あえて結婚という制度の中に安息を求めようとしなかった一葉の姿を、俊子はここで見つめているのであろう。この点から考えると、俊子はここで一葉文学の「旧さ」や、また「恋」に対し儒教道徳に従う陳腐な態度を強調しようとしたのではないことが一層明らかになってくる。即ち、俊子とらいてうの「一葉観」の異なる点は、俊子が作家対作家として、同じ立場に立って一葉の文学や一葉という女流作家を再定義しようとした点である。そして俊子はここで一葉文学の成功が、「自己本位」（一葉の苦しい境遇）的な経験からの偶然の結果として、「理想もなく主義もなく、唯勝利者と云ふ事のみ」と批判しているのである。

ところが、俊子はこの「一葉論」を書いているときは、まだ外遊をしたことがない。夫である田村松魚がアメリカに七年間留学をしているため、それによる間接的な経験はあるかもしれないが、それ以外直接的な外国経験はない。さらに、彼女の読書履歴を見ても古典や尾崎紅葉を愛読している。[47]つまり、「新しい女」と標榜しているのとは裏腹に、西洋の

「新しい女」に対する確かな理論的・論理的なものはない。それでは、彼女にとって「新しい女」という定義はどこからきているのだろうか。それは、自分の人生を主体的に生き、その中で「自己」というものに悩まされながら葛藤する姿にこそ、近代的な女性が現れているということであろう。取りも直さず、俊子にとって「自己」という観念は、「新しい女」の近代性の問題につながっており、またこれによって自分を「新しい女」として位置づけているのであろう。そのためにここで俊子は一葉を「新しい女」の文脈から排除していないのである。

即ち、職業作家として身を立てようとした俊子は、女性の自立が大変難しい時期に職業作家として身を立てていた一葉から多くの感化を受けていたと思われる。そのため、「私の考へた一葉女史」は、作家として主体的な「自己」を持った「一葉文学論」と、糊口のために生まれた偶然の「自己本位」的な「一葉文学論」という二つの視点に立っているのである。これは一見、相反する論点ではあるが、実際のところ、芸術家として「真の自己の改革」[48]がないという、言い換えれば、芸術家として樋口一葉を問い直すことであった。それは「新しい」・「旧い」という議論の上にある、即ち、作家として作品に向かう志をかけた問題と言えるだろう。

俊子が『青鞜』で標榜した「新しい女」の「新しさ」は、「西洋」からもたらされた概念による近代的自我とは言いがたい。俊子も一葉と同じく、古典を読み、擬古文を書き、その上作家としてデビューしている。つまり、一葉と同じく出自や境遇から育まれた「下町の新しい女」であると言える。[49]

しかしながら、らいてうがいう「一葉には一葉自身の思想がない」という論理、つまり当時の「新しい女」たちにとっての「一葉観」の見直しは、ここで俊子がいう「自己」と合わせて考えると、「新しい女」は「新しい思想」というものに収斂されていった傾向が見られる。そのため、一葉の文学を離れて、ひたすら一葉が経験した貧困や「恋愛」に対する姿勢を取り上げ、論じて行くことに論点が収拾される結果となったのである。そして、一葉文学の底に流れる芸術性や対社会性への疑問より、近代を生きる女性としての「新しさ」に論点をからめとってしまう選択が行われたのである。それにより、一葉文学の明治社会に向けられたまなざしを、「偶然」として追い払い、同時にそれでも認めざるを得ない一葉の主体性を伏流として語らざるを得なかったのであろう。ここからも明らかなように、大正時代の女性たちにとって新しい近代は、少なくとも「新しい女」にとっての「一葉観」は、彼女らの心の動揺から出発し、選択を経て言説化された「一葉観」であったのである。

結びに代えて

私的な領域である日記が公的なものとなった事象として、一葉日記の出版（明治四五年）は、当時大きい反響を呼び起こしたのである。本論ではとりわけ反応が早かった二人、平塚らいてうと田村俊子における「一葉観」を中心に『青鞜』と一葉の影響関係を追及した。その中で、らいてうは一葉の「恋愛観」に着目し、一葉が「新しい女」ではないと反駁したのである。しかし、らいてうの考える「一葉観」には、揺れ動く二つの視点が見られた。即ち、「恋愛観」から見られる一葉を「旧い」と言いながら、一方では「われわれは女ぞ」と今の女流作家たちが言えるようになったその背景に、一葉の存在を認めていたのである。そのため、らいてうは、一葉を完全に「旧い女」として批判することができなかったのである。むしろ、一葉の文学に対する死後の再評価の動きの中で、当時の文壇になおも続いていた一葉の人気を逆手にとり、それをバネにして「新しい女」の世間への認知を図った政治的な含みを持った批判であった。

一方、田村俊子の場合、幸田露伴を通し直接的に樋口一葉の影響を受けた作家であった。彼女の初期作品はいわゆる「一葉張りの文章体」で、文壇に登場してきたのである。俊子は一葉の日記を通し、自らの文学修業時代の影響から抜け出ることを図り、一葉と自分を区分しようとした。だが、俊子は芸術家として「自我的生活」を重んじ、「自己」にこだわり続けた作家である。そのような俊子が自立した職業作家として主体的に生きていた一葉の影響から完全に抜け出ることはできなかったのである。そこで彼女は、らいてうのように揺れ動く立場ではあるが、しかし「新しい女」を標榜するためではなく、作家対作家として、自分を樋口一葉から区分しようとしたのである。しかし取りも直さず、一葉の「下町の新しい女」の気風に最も感化されたのは、職業作家として身を立てようとした田村俊子であったのである。

このように、近代の一葉は、女性たちにとっていわゆる「幻影（ファンタスマゴリア）」としての存在であったと考えられる。つまり、陰影が確かでない明け方の薄暗い中で生まれる、視線の「幻影（ファンタスマゴリア）」である。それは人によって白にも映り、黒にも映るのである。そのため、その視線の「幻影（ファンタスマゴリア）」は、それぞれの女性たちの関心のあり方を映すフィルターであったと言い換えられよう。そのフィルターにより、一葉の姿は取捨選択されてきたのである。本稿はそのフィルターを含めて、陰影の全体を捉えようとした一つの試みである。

そして、一葉の作品が今もなお、百年以上に及び長らく我々に感動を与えているのは、「旧い」価値を押し付けているからではなく、自分の視線で見た明治社会を描き続けてい

たからである。とりわけ、少女や婦人、あるいは娼婦など、女性の姿に注目して作品化していることは、自分が女として生きる明治社会の風当たりを、批判的な眼で見ることができたからであろう。そのため、一葉の作品に「西洋流」のフェミニズムや、当時の自由民権派が理想としている積極的な自由主義運動のエネルギーを見つけることは難しい。しかしながら、女性解放運動の思想に「内発的なフェミニズム」の枠組みを示唆していた源流であったことは意義深い文脈であると考えられる。今後は一葉から近代の女性文学者へとつながっていく、この「内発的なフェミニズム」の視点から、近代女性文学を再検討する必要があると考えられる。

注

1 樋口勘次郎（生没年未詳）。一葉の「ミづの上日記」明治二九年六月十七日の日記によると、当時高等師範学校付属小学校の訓導だった樋口勘次郎は、小学校初級用の修身教科書改訂に一葉の協力を求める書簡を送っている。塩田良平・和田芳恵『樋口一葉全集第三巻（上）』（筑摩書房、一九九四年）、五〇四頁。

2 和田芳恵（編）長谷川泉（監修）『近代作家研究叢書一一七―樋口一葉研究』（日本図書センター、一九九二年）、四三九頁。

3 平塚らいてう「女としての樋口一葉女史」（初出『青鞜』第二巻第十号、一九一二年十月）。ここで使用したテクストは、平塚らいてう著作集編集委員会（編）『平塚らいてう著作集第一巻』（大月書店、一九八三年）による。引用は、一五四頁。

4 関良一『樋口一葉　考証と試論』（有精堂出版、一九七〇年）、三九五～三九七頁。

5 中山清美氏はこの「一葉観」について関良一氏と山根賢吉氏の指摘を踏まえ、一葉の日記（明治四十五年）出版に伴い、一葉の没後の新たな「一葉観」提出が試みられたと指摘している。そしてこの契機に反応した平塚らいてうの「一葉観」を分析している。「明治四十年代　一葉受容と「新しい女」――「円窓より　女として樋口一葉」を中心に――」[『名古屋近代文学研究』（第十五巻、一九九七年）]。

6 上野遙「母上野葉子の生涯と『青鞜』」（『いしゅたる』十号、一九八九年。ここで葉子の息子である上野遙がその名前の由来を語っている。

7 『葉子全集』全二巻（叢書『青鞜の女たち』第十二巻、復刻版、不二出版、一九八六年）上野葉子の死後（一九二八年死去）、夫である上野七夫の手によって出版されたものが残されている。

8 明治二九年二月二十日。一葉が死ぬ九ヶ月前である。

9 平塚らいてう、前掲書、一五四頁

10 この分類は、山根賢吉「視線のなかの一葉　平塚雷鳥」[『国文学解釈と教材の研究』（第三九巻十一号、学燈社、一九九四年）、一〇一頁]を踏まえている。

11 山根賢吉、前掲書、一〇一頁。

12 中山清美、前掲書。

13 この視点について中山清美氏は次のように言及している。「対世間的な面から考えると、当時既に「天才」と言われ、「女神」と迄崇められた一葉の悲しさに同情してしまえば、同時に当時の男性が理想とする「懐かしい尊敬すべき奥床しい女情」を称揚してしまうことになる、それでは「旧さ」を脱せない。」前掲書、一三一頁。

14 関礼子『一葉以前の女性表現――文体・メディア・ジェンダー』（翰林書房、二〇〇三年）、一六四頁。

15 関礼子氏は『一葉以前の女性表現――文体・メディア・ジェンダー』（八頁）の中で、「明治二十九年（一八九六）の死から三〇年代の半ば頃まで「一葉」という記号はカノン＝模範的な評価基準として機能した」とし、一葉が「小説文体のカノン」として位置づけられていたと言及している。

16 平塚らいてう、前掲書、一五七頁。

17 木内錠「一葉女史論」『女史文壇』（一九一二年十二月）二十二～二十三頁。

18 日本の従来の「恋」や「色」と、西洋からもたらされた観念である「恋愛」を分析したものに、佐伯順子氏の著書『「色」と「愛」の比較文化史』（岩波書店、二〇〇〇年）がある。

19 平塚らいてう、前掲書、一五七頁。

20 「若葉かけ」（明治二十四年六月十九日）、塩井良平・和田芳恵（編）、『樋口一葉全集第三巻（上）』前掲書、三十三頁。

21 初出、『文学界』第三号（明治二十六年三月）。

22 平塚らいてう、前掲書、一五九頁。本稿の傍線はすべて筆者による。

23 「よもきふ日記」（明治二十六年二月二七日）、塩井良平・和田芳恵（編）、前掲書、二十六頁。

24 平塚らいてう、前掲書、一六一頁。

25 平塚らいてう、前掲書、一六九頁。

26 平塚らいてう、前掲書、一六五頁。

27 田村俊子『田村俊子作品集・三』（オリジン出版センター、一九八八年）、四四七頁。

28 「三人冗語」『めざまし草』（明治二十九年四月）に掲載。和田芳恵（編）長谷川泉（監）『近代作家研究叢書一一七――樋口一葉研究』（日本図書センター、一九九二年）三五九頁。

29 「ミつの上日記」（明治二十九年七月二十日）、塩田良平・和田芳恵（編）、前掲書、五二二頁。

30 幸田露伴「故樋口一葉女史」『成功』明治三七年（第五巻第一号）。

31 露伴は明治四十五年の『一葉全集』刊行に際し、序文を書いており、その後も一葉に関して文章を書いている。

32 福田はるか『田村俊子　谷中天王寺町の日々』（図書新聞、二〇〇三年）六七頁。

33 関礼子、前掲書、四七～八〇頁。

34 田村俊子『田村俊子作品集・一』（オリジン出版センター、一九八八年）、三九九頁。

35 関礼子氏は、すでに初期作品群の田村俊子の文体について、一葉の文体と比較しながら綿密な分析を行っているので、ここでは、簡単に紹介するにとどめる。

36 田村俊子「私の考へた一葉女史」『新潮』（大正元年十一月）第

十七巻第五号、二十四頁。

37 田村俊子『田村俊子作品集・三』、前掲書、年譜参照。

38 田村俊子「私の考へた一葉女史」、前掲書、三十頁。

39 初出、「微弱な権力」『文章世界』（大正元年九月）。

40 田村俊子『田村俊子作品集・三』、前掲書、三三三頁。

41 黒澤亜里子「解説」『田村俊子作品集・三』、前掲書、四四二頁。

42 田村俊子『田村俊子作品集・三』、前掲書、三三六頁。

43 関礼子、前掲書、四十八頁。

44 田村俊子、「私の考へた一葉女史」前掲書、二十五～二十六頁。

45 田村俊子、「私の考へた一葉女史」前掲書、三十～三十一頁。

46 田村俊子、「私の考へた一葉女史」前掲書、三十一～三十三頁。

47 瀬戸内晴美『田村俊子』（角川書店、一九八六年）三五二頁。

48 田村俊子、「私の考へた一葉女史」、前掲書、三十九頁。

49 田村俊子は東京浅草区蔵前町で生まれた、いわゆる江戸っ子である。